富山市科学博物館
TOYAMA SCIENCE MUSEUM

富山湾氷見市の海岸に漂着したオットセイについて

著者	南部 久男, 田島 木綿子, 荻野 みちる, 倉持 利明, 山田 格, 田中 豊
雑誌名	富山市科学文化センター研究報告
号	23
ページ	169-171
発行年	2000-03-25
URL	http://repo.tsm.toyama.toyama.jp/?action=repository_uri&item_id=737

富山市科学文化センター研究報告第23号，pp.169-171（2000）

短　報

富山湾氷見市の海岸に漂着したオットセイについて*

南部久男[1)]，田島木綿子[2)]，荻野みちる[2)]，
倉持利明[2)]，山田　格[2)]，田中　豊[1)]
富山市科学文化センター[1)]、国立科学博物館動物研究部[2)]

A stranding record of the northern fur seal, *Callorhinus ursinus*, from the shore of Himi city, Toyama Bay

NAMBU, H., TAJIMA, Y., OGINO, M., KURAMOCHI, T., YAMADA, K. and TANAKA, Y.

オットセイ*Callorhinus ursinus*は，アシカ科に属し，太平洋北部，ベーリング海，そしてオホーツク海に広く分布し，日本近海には冬から春の非繁殖期に三陸沖や日本海に索餌回遊してくる（和田，1996；ジェファソン他，1999）。近年の本種の日本海沿岸におけるストランデングレコードは北海道小樽市で報告されているが（日本鯨類研究所，1998），今回，富山湾では初めてと思われる死亡個体が漂着したので報告する。

漂着状況

1999年5月8日午前11時30分頃，氷見市海浜植物園の瀧口景子氏が同市島尾松田江浜で海浜植物調査をしていた折に，波打ち際に打ち上がっていた死亡個体を発見し，富山市科学文化センターに連絡していただいた。同日，同センターの南部久男と田中豊により調査を行い回収した（図1，2）。漂着個体はすでに腐敗が始まり，やや腐敗臭が漂っていた。

その後当館で冷凍し，国立科学博物館動物研究室動物第一研究室に搬送し再度冷凍保管した後，剖検（寄生虫確認含む），分析用サンプルの収集及び骨格標本の作製を行った。

漂着個体の形態

Ⅰ．外部形態

胴部中央から頭部にかけては毛が脱落し，胴部後方部には長く密に生える毛が残っていた。頭部には耳介が認められた。頭部前方部は破損しており，頭部右側

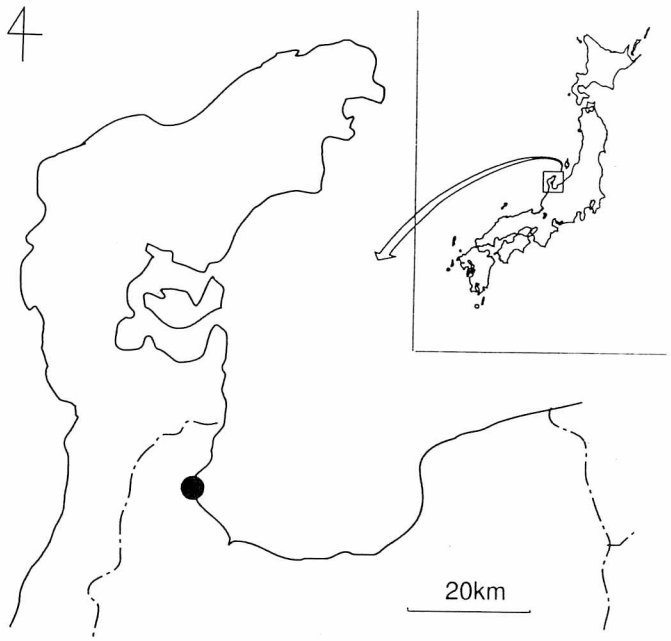

図1　オットセイの漂着地点（●）

前半部は一部欠損していた。四肢のヒレには毛がなく皮膚が裸出していた。後ろヒレの肢の長さはそろっていた。外傷は認められなかった。

Ⅱ．性別　オス

Ⅲ．外部計測値

計測部位を図3に示す。吻部先端が破損していたため，吻部を起点とした計測値は括弧で表した。吻端～尾端長及び吻端～後肢端長は腹部を下にして計測した。単位はcm。

1.	吻端～尾端長	(89.3)
2.	吻端～後肢端長	(112.0)
3.	吻端～眼中心長	(4.3)
4.	吻端～耳孔長	(9.0)
5.	吻端～前肢前端長	(37.5)
6.	吻端～前肢端長	(66.8)
7.	吻端～へそ孔長	(66.0)
8.	吻端～乳頭長	－
9.	吻端～生殖孔長	(73.5)
10.	吻端～肛門長	(84.6)
11.	口角長 1	－
12.	口角長 2	－
13.	乳頭幅	－
14.	前肢後縁長	（左）11.2（右）10.0
15.	前肢端幅	（左）13.5（右）15.9

＊富山市科学文化センター研究業績第225号

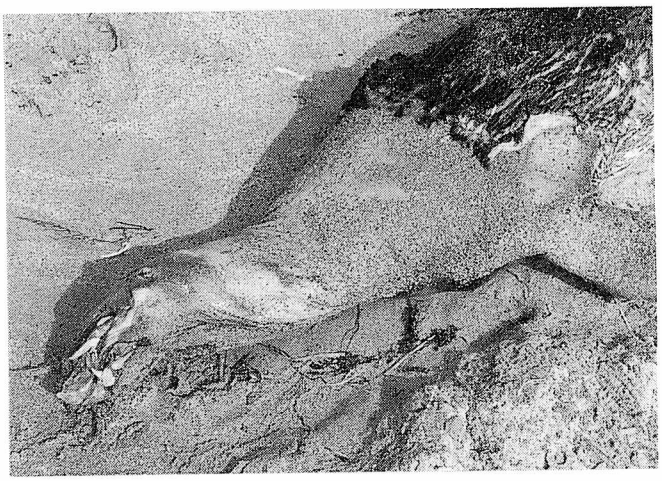

図2　漂着状況（上），全身（中），左頭部から胴部（下）

16. 前肢前縁長（左）29.6（右）32.2
17. 前肢基底長（左）　8.2（右）　8.0
18. 前肢幅最小（左）　6.0（右）　5.5
19. 前肢幅最大（左）　8.1（右）　9.0
20. 後肢幅　　（左）　4.9（右）　4.3
21. 後肢長　　（左）27.2（右）27.5

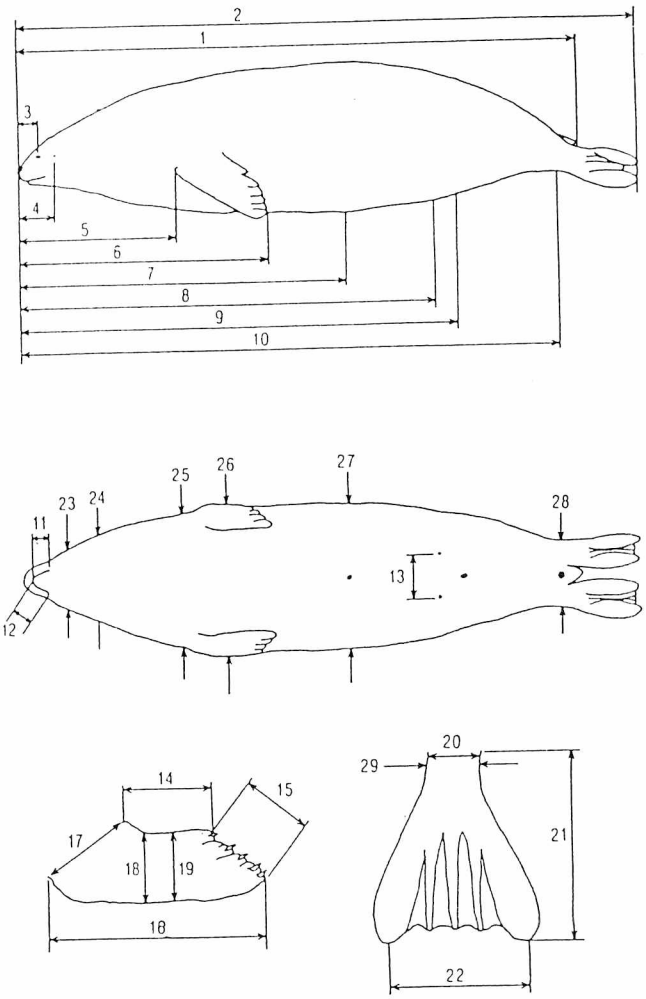

図3　計測部位

22. 後肢端幅　（右）　6.0（左）　6.6
23. 頭部周囲長　　32.4
24. 頚部周囲長　　29.5
25. 肩部周囲長　　57.5
26. 液窩部周囲長　　56.7
27. さい部周囲長　　53.5
28. 肛門部周囲長　　24.2
29. 後肢周囲長（左）14.1（右）14.2
・生殖孔周囲長　　44.3

Ⅳ. 体重（g）　　9120

Ⅴ. 内臓重量（g）
・肝臓　　276
・胃（内容物含む）　　131
・大腸と小腸　　335
・心臓　　121
・肺　　（左）　93　（右）116
・脾臓　　15

・膵臓　9
・腎臓　（左）66（右）62
・精巣　（左）1（右）1
・腸リンパ節　23

Ⅵ．内部形態

皮下脂肪は認められず，非常にやせた個体であった。内臓は腐敗がはげしく融解に近い状態であった。胃内容物はイカ類の顎器のみであった。内臓からは寄生虫は認められなかった。大まかに除肉した後，晒骨装置で煮沸し（80℃），骨格標本にした。頭骨は右側前部（上顎骨）及び右下顎骨は欠損していた。左側前部の上顎骨は外れていた。頭骨長は15.1cm（前端部欠損）であった。

今回漂着した個体は腐敗が進み，頭部前方部の形が崩れていたが，耳介が認められたこと，四肢のヒレが毛で被われていないこと，後ろヒレの肢の長さがそろっていること，胴の後半に残っていた毛は長く密に生えており極めて柔らかいこと，頭骨の前方部が丸みを帯びるなど，オットセイの特徴を持つことより（ジェファソン他，1999）本種と同定した。

和田・伊藤（1999）は，オットセイのオスの成獣及び新生児の体長と体重はそれぞれ，200cm，210kg及び66cm，5.4kgと述べ，また，Scheffer（1955）を引用し，「体長（オス）を例にとると，2歳で1914年の102.9cmから1943年の99.9cm…」と述べており，今回の個体は約90cm＋であるので間もなく2歳になるものと推定される。

オットセイ*Callorbinus ursinus*は，日本海には冬から春にかけ索餌回遊し南限は朝鮮湾から大和堆とされ，外洋性の生活を送るため沿岸から見ることはない（和田・伊藤，1999）。日本鯨類研究所発行の鯨研通信（1991年発行381号〜1999年発行402号）の1991年1月〜1999年2月の記録によれば，近年の日本沿岸のオットセイのストランデングレコードは，太平洋側では青森県1例，宮城県2例，茨城県1例，神奈川県1例で，日本海側では北海道小樽市1例（1996年5月）である（日本鯨類研究所，1996a，1996b，1998）。今回の漂着個体は，日本海の南限付近の海域でなんらかの原因で死亡した個体が流れついたものと思われる。

標本の保管

表皮，脂皮，筋肉，肝臓，腎臓，血液は，将来のDNA及び海洋汚染物質の解析用のサンプルとして国立科学博物館動物第一研究室及び愛媛大学農学部環境化学研究室田辺信介教授の元で保管し，骨格及び胃内容物は富山市科学文化センターで保管している。なお，今回の漂着については富山県水産漁港課へ報告した。

謝　辞

オットセイの漂着情報を教えていただいた氷見市海浜植物園の瀧口景子氏，作図をしていただいた富山市科学文化センター志波友子氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

トマス・A・ジェファソン，スチーブン・レザウッド，マーク・A・ウエバー著，山田格翻訳，1998．海の哺乳類FAO種同定ガイド．336p．NTT出版．東京．
（Jefferson，T. A.，S. Leatherwood，and M. A. Webber，1993. FAO species identification guide. Marin mammals of the world．320p. Rome.，FAO.）
日本鯨類研究所，1996a．ストランデイングレコード（1996年4月〜8月受け付け）．鯨研通信（391）:29-32.
日本鯨類研究所，1996b．ストランデイングレコード（1996年3月〜4月受け付け）．鯨研通信（390）:22.
日本鯨類研究所，1998．ストランデイングレコード（1998年4月〜5月受け付け）．鯨研通信（398）:25-28.
Scheffer，V.B.，1955. Body size with relation to population density in mammals. J.Mamm.，36: 493-515.
和田一雄，1996．オットセイ．pp.94-95．日本動物大百科．哺乳類Ⅱ．平凡社．
和田一雄，伊藤徹魯，1999．オットセイにみるその生態．鰭脚類．アシカ・アザラシの自然史．pp.284．東京大学出版会．